

(3頁の続き)

その後、明代『嘉靖丙辰』(1556年)の紹介があり、原本が日本(東京)にあるとうかがい大変興味深く感じました。

舌診の実証説明においては、舌診の第一人者である梁嶸教授から詳細な説明をしていただき、大変貴重で有益な講義となりました。舌診においては、診断時と場所(光)が非常に重要であることが改めて強調され、教授の臨床での患者とのやりとりも紹介されました。舌診は、朝起きてすぐに、何も飲食しない状態で、自然光の下で行なうことが重要とのこと。また患者が力を入れすぎないことも大切とのこと、一人一人舌を診ていただくこととなりましたが、自分は、やや緊張して力を入れすぎてしまいました。また、日本人の多くが歯痕舌であることが特徴とのこと、朝起きた時に歯痕舌でも昼前に消えている場合、あるいは出してすぐに痕があっても、動かすと消えるような場合は問題ないとの、実証的説明もありました。

舌は、身体の不調が明確に現れる前に、あるいは、自覚する前に、先に何らかの変化が現れることも多いとのこと。まずは毎日継続して自分の舌診を行なっていきましょう、とのことでした。

有益で貴重な講義で、あっという間に時間が過ぎてしまい、もっと講義をうかがいたいと痛切に感じました。一方で、自分の勉強不足で臨んだことが大変もったいないことと反省致しました。講義終了後、終了証をいただきましたが、舌診をはじめ中医学の深く遠い道のりの入り口であると感じています。

講義が終わり、短時間の立ち話になってしまいましたが、日本語訳をしていただいた吉川さんの留学生活や思いをうかがい、大変印象深く心に残りました。

6月の北京はどんよりとした曇り空を急変する天候でしたが、貴重な時間により、改めて力をいただいた機会となりました。

貴重な講義をしていただいた梁嶸教授および的確な通訳をしていただいた吉川あけ淳子さんには、心より感謝申し上げます。
ありがとうございました。



参考文献「中医臨床」『舌診の萌芽～舌の生理と疾病の関わり～』梁嶸



2014年度国際薬膳師(士)資格認定 合格者の喜びの言葉



国際薬膳師(士)資格認定試験に合格して

2012年度通信コース卒業生 村上 さおり

この度、国際薬膳師の試験に合格することができ大変うれしく思います。また、試験に臨んだ全員が合格できたことは、劉先生をはじめとする先生方のご指導の賜物と心から感謝いたします。

岩手県陸前高田市の農家に嫁いだ私は、食材の持つ力を知りたいと思い、地元の漢方薬局の会員6名程の薬膳勉強会に参加していました。しかし東日本大震災により会は解散。我が家も内陸に転居し地元に戻る目途が立たない中でしたが薬膳の勉強を続けたいと考え、通信コースを受講しました。正直いって最初は日常生活に気を取られて勉強に身が入らず、1年目が終わる頃にスクーリングに参加し他の方の姿に刺激を受け、ようやく真面目に勉強し始めました。難しさに音を上げそうになりながらも家族の協力を得て、先生の丁寧なご指導を受け、頑張っている仲間の姿を思い浮かべながら課題に取り組み、なんとか期限内に提出できたのが良い糧になったと実感しています。試験対策講座でも同志が沢山いることに励まされ、試験勉強に力が入りました。

勉強を始めた頃は知識が身に付いたことの証明が資格であると思っていました。しかし試験に合格した今思い浮かぶのは、試験日に劉先生がおっしゃられた「合格がゴールではありません。本当の勉強の第一歩です。」という言葉です。この言葉の意味を噛みしめ、努力を続けていきたいと思えます。そして、合格者各々の立場で薬膳の魅力を多くの人と分かち合えるよう知識と経験を積んでいくことが先生方への恩返しであると思えます。私事ながら陸前高田市に戻り農業を再開した際は、生産者という立場を活かした薬膳の普及に貢献していきたいと考えています。

最後になりましたが、先生方には今後とも引き続きご指導賜りますようよろしくお願い申し上げます。

